

平成 18 年 7 月 8 日

第 22 回鴨川義塾定例読書会・レジュメ

大久保啓次郎

# 日本国民の主体性と日本国の外交力 について、皆様とご一緒に考える

——福澤諭吉の「精神的独立論」を前提として——

## (1) 福澤諭吉の「独立論」のまとめ

「一身独立して一国独立する」(学問のすゝめ 3編)・・・明治6年

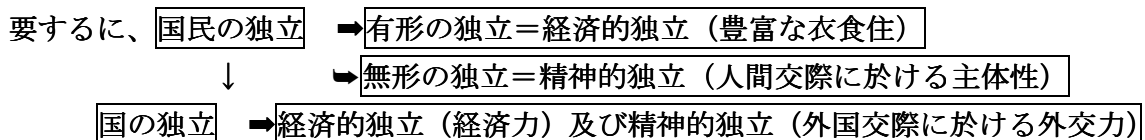
全国民に独立の気力がなければ、一国の独立などありえない、と言っている。

1. 国民の独立には二形態あり、ひとつは有形の独立＝経済的独立であり、もうひとつは、無形の独立＝精神的独立である。経済的独立とは、衣食住に困らない事を言う。精神的独立とは、「社会の交際、処世法において、自分の思う事を言い、自分の思う事を行動に移し、・・・秋毫の微も節を屈する事なき事を言う。」

つまり、主体性ある発言や行動が出来る事を言う。

2. 国の独立にも二形態ある。経済的独立と精神的独立である。

経済的独立とは、その国の経済力であり、精神的独立とは、その国の外交力である。



## (2) 日清戦争前後に於ける日本国民及び日本国の独立情況

「開国以来 40 年、その間に我が国の文明は大いに進歩し変化したと皆喜んでい。これは、汽車・汽船・道路・港湾・建築など「有形の物」が立派な西洋式になったことを喜んでいのであろう。しかし、文明の本意は、そのような「有形の物」のみでなく「国民全体の智徳」という「無形の物」がこれに伴って進歩し変化してこそ、はじめて「独立国の基盤を堅固にする」ことが出来るのであって、自分は常にその問題を念頭に置いている。」(明治 29 年=1896 年：福翁百話を時事新報に連載するに当たっての序言)

上記のような福澤の見解によれば、開国以来日本は西洋文明を積極的に取り入れた結果、経済的独立の基盤を築いたが、精神的独立については、未だ道遠しの感があった。

福澤諭吉は、日本国民が容易に精神的独立出来ない原因として、「開關以来我が国には、人間交際に於いて [権力の偏重] があった事を強調している。

(3) 日本国民(日本国)はなぜ「精神的独立」が出来ないか？

「日本の武人は開闢の初めよりこの国に行わるる人間交際の定則に従って、「権力偏重」の中に養われ、常に人に屈するを以て恥とせず。彼の西洋の人民が自己の地位を重んじ、自己の身分を貴びて、各々その権義を持張する者に比すれば、その間に著しき異別を見るべし。」(文明論の概略：第9章)

「日本の人間交際は、至大より至小に至るまで、上古の時より治者流と被治者流との二元素に別れて、「権力の偏重」を成し、今日に至るまでもその勢いを変じたることなし。人民の間に自家の権義を主張する者なきはもとより論を俟たず…乱世にも治世にも、人間交際の至大より至細に至るまで、「偏重」の行われざる所なく、又この偏重に由らざれば事として行われるべきものなし」(文明論の概略：第9章)

福澤はこの国の文明の特質は人々が主体的に参与する事のない「権力の偏重」による歴史であると明言し、この国と西洋文明を比較して異なる所は、あらゆる人間交際において、西洋の人民が自己の地位を重んじ、自己の身分を尊重して、各々その権義=権利を主張するのに対して、この国では国民が自らの地位、立場を疎んじているが、その違いはアジアの気候風土によるものではなく、「上下・主客・内外」などの二分法的発想によるこの国特有の固定化された「人間交際」、いわば構造的特質に因るものであると言う。

(4) 人間交際に於ける「権力偏重」の歴史はいつまで続いたか？

鴨川義塾・塾長の石坂 巖 先生によれば、「第二次世界大戦・敗戦まで」続いた。「明治14年の政変」により、以後は、福澤論吉の思想は敗戦まで批判され続けた。福澤論吉が評価されるようになったのは、敗戦後である。

満州事変から日中戦争、そして太平洋戦争と続いた時代には、天皇を中心とした挙国一致体制であり、自由な発言や行動などは許されるはずがなかった。

(5) 現在の日本国民(日本国)は、「精神的に独立」しているか？

言葉を言い換えると、「現在の日本国民は、人間交際に於いて、主体性を持って発言し、行動しているか？又、国民の代表である日本国は、外国交際に於いて、外交力を十分に発揮出来ているか？」という問題になる。

日本人一人当たりの国民所得や日本の経済力に関しては、世界でもトップクラスにあり、国民も国も「経済的独立」では、問題なく要件を充たしている。

戦後60年、日本は民主主義の旗印の下に、憲法改正、教育制度を含めたあらゆる制度の改革を推進してきた。しかし、「精神的独立」に関しては、まだまだ発展途上国(民)のような気がする。「いやそうではない」と言う人もいるでしょう。以下この問題に関するアンケート調査を基に皆様とご一緒に考えてみたいと思います。どうぞよろしく！